

純米大吟醸『氏郷公』 はぐくみプロジェクト



始動

日野で米を作り



蒲生氏郷公顕彰会日野
堀江 清一郎 会長

『蒲生氏郷ここにあり』

プロジェクトは日野町の酒米作りからスタートします。顕彰会日野長の堀江さんは「米どころの日野町で酒米を作ること、3市町が力を合わせて一つのものを作ることに意味がある。酒を造ることで酒米を育て

た日野町のことも知ってもらい、氏郷公のことはもちろん、そこから日野商人の精神等も多くの人に知ってもらいたい。そして、日野町で生まれた方に、氏郷公の偉大さをもう一度学んでいただき、この町に自信と誇りを持ってもらいたい」と、期待されています。

また、「お酒ができて満足するのではなく、継続して、いろいろな形でPRしていきたい。何よりも関心を持ってもらうことが大事。『蒲生氏郷ここにあり』と広げたい」と意気込みもお話いただきました。

会津で醸造



蒲生氏郷公顕彰会会津若松
新城 猪之吉 会長
(末廣酒造株式会社 代表取締役社長)

『おいしいものを目指して』

醸造を担当される顕彰会会津若松会長の新城さんは「3市町が合同で行い、多くの方が関わるこのプロジェクトでは、おいしくないお酒は出せない。また、期待値も大きいのでその分、不安もありこわい」と初め

での取り組みに不安を感じておられました。しかし、「無事に出来上がったら氏郷公の墓にも持って行きたい」とお話しいただきました。

また、「この取り組みが一回きりのもので終わるのではなく、これからも継続していくことが大事。特に、日野町が山田錦を育てるのも初めて、うちの蔵でも山田錦を使って純米大吟醸酒を造るのも初めて。酒造りと米作りは連鎖していて、回数を重ねることにお互いの腕が上がる。おいしいものを目指すなら、毎年続けられないといけない」とお話しいただきました。

純米大吟醸『氏郷公』はぐくみプロジェクトは、戦国武将蒲生氏郷にゆかりのある日野町、福島県会津若松市、三重県松阪市が合同でそれぞれの得意分野を活かし「蒲生氏郷の酒」造りと氏郷をPRしていくものです。

3市町にはそれぞれに「蒲生氏郷公顕彰会」があり、活動をしています。毎年、氏郷の命日に墓のある京都市の大徳寺黄梅院での法要のときに、親交を深めてきました。昨年、法要前日の懇親会で、会津若松市の顕彰会会長を務める「末廣酒造」代表取締役社長新城猪之吉さんが、蔵のお酒に「氏郷公」とかかれたラベルを貼って持参されたことが、プロジェクトの立ち上げのきっかけです。

「このお酒を日野の米で作れないか」「せっかくなら3市町で酒造りをしよう」「それなら、松阪木綿はつかえないか」と盛り上がり、一年間の準備期間を経て5月26日に日野町西大路の田んぼで山田錦の田植え式となり、プロジェクトがスタートしました。当日は約50名の参加者があり、田植えの後には4月に開館した近江日野商人ふるさと館にて、日野の伝統料理を食べながらプロジェクトの成功を祈願しました。

『氏郷公』のお披露目は来年の日野祭（5月3日）で行い、9月には会津まつりで、11月には松阪氏郷まつりにて振舞われる予定です。



増田 孝一郎 さん



坂田 東作 さん

『愛情を持って育てます』

山田錦を育てるのは、坂田さんと増田さんのお二人です。プロジェクト立ち上げ当時、農業委員を務めておられた坂田さんに話があり、稲作経営者会の増田さんにもお誘いがありました。話を聞いてお二人は「おもしろそう。3市町が一緒にできたら良い」と、やってみようと思われたそうです。

山田錦を育てるのは難しく、酒米を育てられるのがお二人とも初めてのこと。「やってみないとわからない、やってみるのがおもしろい。やってみないと始まらない」とおっしゃいます。

また、「酒米作りが、農家の収入につながれば良いと思う。そのためには、酒米作りが次の人に引き継いでいけるようにしたい」とお話しくださいました。



末廣酒造株式会社
津佐 幸明 さん

『喜びと誇りになる』

末廣酒造製造部長で杜氏（酒造り職人）の津佐さんは「山田錦という最上級の酒米で純米大吟醸酒を造るのは初めて。それも、氏郷公のゆかりの地で作られた米で酒を造れることにやりがいもあり、喜びと誇りにもなる」と職人としての楽しみがあらうようです。

松阪で飾る



蒲生氏郷公顕彰会松阪
高島 信彦 会長

『酒造りで3市町が一緒になる』

お酒は松阪市の伝統工芸である松阪木綿で飾ります。顕彰会松阪の高島会長は「プロジェクトは3市町のネットワークの強化につながる」とおっしゃいます。

また、「今回の取り組みで3市町のゆかりもより深いものになり、顕彰会の活動にもつながり、全国の方に蒲生氏郷公を知ってもらうきっかけになる」ともお話しくださいました。



醸造の様子
（末廣酒造株式会社提供）

「顕彰会が蒲生氏郷公を広め、継承していくことももちろん大事なことです。その活動だけにとどまらず新たなことに取り組み、組織として強化していくためにも、一石を投じないといけない」と考えておられたそうです。

また、「顕彰会の会員以外の方も一緒に取り組むことで、自然と顕彰会の取り組みも大きくなる。来々、酒が完成して販売のPRだけではなく、氏郷公のPRもしないといけない。これからどのような方法で広めていくのか、検討の必要がある」とお話しくださいました。